

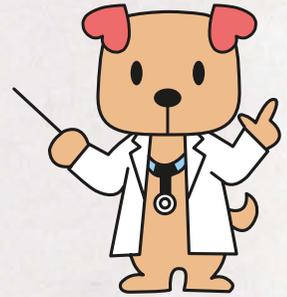
こころ の 健康

気分障害について

その4 新型うつ病の登場

千葉県医師会 ねもととよみ 根本 豊實 医師

それまで一世を風靡していたメランコリー親和型に代わって、80年代から90年代にかけて新型うつ病が目立ち始め、多くの臨床家の注目を集めました。この変化の背景には、以前言及したうつ病診断の変化や、うつ病概念の一般大衆への急速な普及、製薬会社の抗うつ薬販売戦略などが挙げられますが、何より最も本質的な背景は社会の変化とそれに伴う個人の価値観の変貌しゅうえんが考えられます。この社会の変化の要点は、高度経済成長の終焉です。



では、新型うつ病が、古典的なメランコリー親和型とどう異なるのか。ここでは病前性格と症状と経過・治療に関して相違するポイントを簡単に説明します。

まず病前性格については、メランコリー親和型では几帳面、秩序愛、他者配慮性の3要因が目立つ同質な一群であったのに対して、新型では同質性はそれほど目立たず、一定の性格傾向にまとめることは困難と言えますが、少なくとも秩序愛や他者配慮性は目立たず、一部ではこれらとは逆に自己中心的、自己愛的（他者の評価を過剰に求める）で未熟な要因が目立つ傾向も指摘されています。

次に症状についてですが、要点は不全性・易変性と他責性の2点です。メランコリー親和型では、うつ病の症状がほとんど出現する等質な一群であるのに対して、新型ではすべてそろうことは稀で、その意味で不全性と言えます。またメランコリー親和型は症状が一定期間は持続的であるのに対して、新型では、状況の変化によって症状の出没がみられ、例えば、会社には出勤できないが、友人とは元気に遊びには行けるなどということが散見されます。また、メランコリー親和型がほとんど自分を責めるのに対して、新型では自分の不調を誰か他人（家族や上司など）のせいにする傾向が指摘されています。

最後に経過・治療に関しては、慢性化・遷延化と治療的対応の困難さの2点が挙げられます。新型では、メランコリー親和型では奏功した休息と薬物療法の効果が乏しく、治療に反応せず、慢性化・遷延化する傾向がみられます。このため治療的対応が難しく、例えば、従来の決まり文句であった「頑張らないこと」などとアドバイスすると、その通りいつまでも頑張らないケースが増えて、最近は適切な伝え方で「頑張ること」と伝えることが主流になってきています。

今回は、このような新型うつ病の登場と臨床における治療法を含めた議論の中で、浮かび上がってきて復権を果たしつつある躁うつ病そう（双極性障害）について解説します。

- *「不全性」：症状が出そろわない
- *「易変性」：症状が変動しやすい
- *「他責性」：思い通りに物事が運ばないときに、それを自分以外のせいにならうとする
- *「遷延化」：長引くこと